

## ボランティア団体が出来上がるまで —きっかけは「たった1人の行動」から—

諏訪 裕美子

### I ボランティア活動とその効果

#### 1. ボランティアについて考える

みなさんは、お店のシャッターや壁、歩道橋などに、スプレーで大きく吹き付けられたわけのわからない落書きを見たことがあることでしょうか。私はそうした落書きを平塚の街からなくすため、2002年に「平塚をみかく会」というボランティア団体を立ち上げました。

ボランティアとは報酬をもらわずに、自分から進んで社会のためになることをすることで、ボランティア団体とは共通の目的のためにボランティアをする人たちが集まって出来た団体です。みなさんの多くは、きっと自分の身の回りにたくさんのボランティア団体があることを知っていることでしょうか。けれども、ボランティア団体が出来る過程を知っている人は少ないかもしれません。そこで、ボランティア団体がどうやって出来るのかというお話を、実際に私が立ち上げに関わった「平塚をみかく会」という団体を例にお話ししてみましよう。それから、ボランティアには不思議な魅力があるということもお話ししたいと思います。

#### 2. ボランティア活動に対するイメージ

数年前のことですが、私はボランティアをしたことのないという身近な人たちにボランティア活動に対するイメージを聞いてみたことがあります。その結果、ボランティアに関わったことのない人たちの多くが、ボランティア活動にネガティブなイメージや決まりきった考えを持っていることが分かりとても驚きました。

また、会社勤めや家庭の主婦たちの中には、「毎日の生活だけでも忙しい。ボランティアどころではない」と答えた人が多かったことも印象的でした。ボランティア活動に関するマイナスの声は大体次のようなものになります。

＊ボランティア活動に対するマイナスのイメージ

- ①ただ働き（だからバカらしいこと）
- ②偽善的なこと（みせかけだけの行い）
- ③独善的なこと（1人よがりの行い）
- ④暇人がすること（仕事を持っていたり、子育てをしていたりすると出来ないこと）
- ⑤余計なこと（ムダで、おせっかいなこと）
- ⑥ちょっと変わった人がすること
- ⑦目立ちたい人がすること
- ⑧（単純に）困っている人を助けること
- ⑨退職者のすること（自分たちの世代にはあまり関係のないこと）
- ⑩売名行為（有名になりたい人がすること）

ボランティア活動とは、「仕事だから」とか、「言われたことだから」という理由で参加するものではありません。ですので、決まり事に慣れてしまっている人たちにとって、「何のためにそんなことをするのだろう」と不思議になるのも無理はないかもしれませんし、またボランティア活動にマイナスのイメージなどをもってしまうのは、残念ですが仕方がないことかと思えます。



平塚市内中心商店街のポールの落書き

### 3. 私にとってのボランティア活動ーボランティアをやって気づいたこと

私が初めてボランティア活動に関わったのは、イギリスに住んでいた今から16年ほど前のことでした。家庭や仕事場以外でも役に立つことをしたいとか、自分が住んでいる地域社会と関わりたいと思いついて、近くの大学で、「日本語を教えます」という広告を出したのが始まりでした。その後、10年間続いた日本語指導のボランティア活動を通して、多くの国々の学生さんや様々な職業の人たちと知り合い、友達になりました。そして、さまざまな国の文化や習慣を教えてもらったり、時としては手料理をご馳走してもらったりと、楽しくて貴重な経験をする事が出来ました。

このような経験から私は、ボランティア活動とは「普段は関わりのない人たちがつながりを持てる不思議な活動」だと気付きました。また、その後に行った落書き消しのボランティア活動を通じて、ボランティアとは、「助けているつもりが、実際は助けられているのはむしろ自分ではないかと気づかせてくれるもの」とか、人間1人の力で出来ることなんかは限られているのに、「思いがけない展開が豊かな結果をもたらしてくれる魅力的なもの」という実感を持ちました。

### 4. ボランティアは「不思議な力を持つ魅力的なもの」

そんな思いに至ったのはきっと、日常の生活の中で常々、人々がなんでバラバラなんだろうとか、物質的には満ち足りているはずなのにどうして心の底から「ハッピー」ではないのだろうと疑問を感じたり、身近なところに置き去りにされたままの問題が多いと感じていたりしたからかも知れません。私は新聞で目にしたりする「社会問題」というものにも関心を持って真剣に解決策などについて考えることがあったのですが、そういった問題について考えたり、心を痛めたりしても、「自分1人でいったい何が出来なのか」という思いがして苦しんでいました。

けれども、ボランティア活動に深く関わるようになってから、今までの考えとは違う体験が出来たので、ものの見方が変わりました。どんな体験かというと、自分が自発的に始めた小さなことがきっかけで、思いもよらない展開が起こり、あとで振り返ってみると自分1人ではどう考えても出来なかったことが可能になったという体験です。この体験を通して、「1人の力は小さいけれど、無力ではない」と身をもって知ることができました。

こんなことから、ボランティアとは、もしかしたら世の中を変えるような大きな力とか可能性を秘めていたりするものではないかとか、ボランティアを「不思議な

力を持つ魅力的なもの」と実感するようになったのです。そして最近とくに様々なボランティア活動が現在の社会で果たしている役割の大きさに気づき始めてもいます。近頃の問題は、政治や経済に任せていてはなかなか解決方法が見つからないことが多いのではないのでしょうか。たとえば、環境問題や平和問題などです。ですから、政治のしくみにも、経済のしくみにもものらない、独立した仕組みをもっているボランティアが、私たちの生活に果たしている役割はかなり大きいのではないかと思います。

みなさんも現にそのような重要な役割を果たしているボランティア団体をいくつかご存知のことでしょう。私の知っている団体の1つに、イギリスの「サマリタンズ (SAMARITANS)」という自殺防止でとても有名なボランティア団体があります。この団体の名前はイギリス国民の95%以上が知っていて、イギリスの電話帳にはこの団体の電話番号が火事、救急車、警察の電話番号と同じように「緊急の番号」として大きく掲載されています。イギリスの自殺率は先進国の中でもとくに低いという統計がありますが、私はこの「サマリタンズ」というボランティア団体が果たしている役割はたいへん大きいと思っています。

今後、社会の仕組みがどんどん複雑になるにつれて、ボランティア団体の役割は、ますます重要になっていくと思っています。

## 5. ボランティア活動の出発点はたった1人の「気づき」から

このように私たちの生活に影響を与え、重要な役割を受け持っているボランティア団体ですが、その始まりは、意外にもたった1人の「気づき」が出発点となっていることがあるのです。

身近な例の1つに、牛乳の紙パックの再生利用があります。今では多くの人が当たり前のように行っていますが、最初に再生利用をしようと「気づいた」のは、たった1人の主婦だったのです。その1人の方の「気づき」に他の大勢の人たちが賛同して団体となりボランティア活動を始めたため、全国に広めることが出来たそうです。

では、たった1人の「気づき」から、実際にどのようにして人々が集まりボランティア団体が出来上がるのでしょうか？ ここで、実際に私が1人で行っていた落書き消しが、どうやってボランティア団体になったのかその過程をお話したいと思いますが、その前にまず、そもそもなぜ、私が落書き消しをしたいと思ったのか、その「気づき」からお話しましょう。



## Ⅱ イギリスでの経験と気持ちの変化

私が自分の故郷の平塚市の落書きに「気づいた」のは、「平塚をみがく会」を立ち上げる2年前のことで、その当時はイギリスから帰国してちょうど2年が経った頃でした。ロンドンに10年ほど住んでいましたが、このロンドンで体験したある出来事が平塚市での落書き消しの「気づき」と「原動力」になったと思っています。そこで、ロンドンで体験した出来事からお話を始めたいと思います。

### 1. 斜陽の国イギリス

イギリスに留学するために日本を離れたのは1989年でした。そのころの日本といえば、好景気を反映するようにお店はどこも繁盛していて、街もいきいきしていたという記憶があります。私は長いこと平塚駅前の銀行に勤めていましたが、道路や商店街などの人が行き交う場所は、いつもきれいでゴミが落ちていることを見かけたことはありませんでした。

ですから、ロンドンに着いて駅周辺や道路のいたるところにゴミが無造作に捨てられているありさまを目の当たりにしてショックを受けました。また、大通りにある店の中にはつぶれたまま放置され、まるでお化け屋敷のようになっているものもかなりあったので、「英国病」とか「斜陽の国イギリス」という表現が現実のものとして感じられ、憂鬱な気持ちで一杯になりました。特に荒廃していたのは人通りの多い地下鉄の駅周辺部でした。

私がロンドンに着いてから2、3年間の間に、日本はバブル経済の絶頂期を迎えるなど、景気がよい状態が続いていましたが、イギリスでは失業率が10%という経済的にどん底の状態でした。ちなみに失業率10%といたら、今の日本の失業率の2倍以上の水準です。

### 2. ロンドンの落書きと故郷・平塚への思い

その不景気の真只中には、ゴミなどの汚さに徐々に「落書き」が加わって街の景観は悪化する一方でした。ロンドンの南東部にあった私の家の近くにも落書きの被害が多発しました。近所に発生したそれらの落書きはベースが暗い色でとても乱暴なものでした。その当時私は留学を終え、ロンドンの金融街の中心と言われるシティというところで働いていました。通勤の際には出来るだけ落書きの前を通るルートを避けていましたが、残業などで帰りが遅くなった場合にはどうしてもこの落書き

の前を通らなくてはならず、泣きたい気持ちになりました。

被害が一番ひどかった場所は地下鉄の駅とバス停を結ぶサブウェイと呼ばれるトンネルのように暗い、人の気配のない地下道の壁でした。その壁は100メートル以上も続いている長いものだったと記憶しています。その壁の両側ともが落書きで埋め尽くされていました。そして、落書きのまわりはなぜかいつもつーんとアンモニアの臭いが充満していたのです。ですから、私はこの1番ひどい落書きの前では息を吸わないように、そして落書きが目に入らないようにと一目散で走り抜けていました。走っている時はいつも孤独感と恐ろしさでいっぱいになり、ふと、「この世の終わり」というものがあれば、まさしくこのようなものではないかと思う瞬間がしばしばありました。みなさんは日本の街を歩いていて、こういう思いをしたことはありますか？ 落書きの前を通るたびに心が冷え冷えとして、落書きが人間の心をこんなにも暗くしてしまうものだということを嫌というほど味わいました。

こんなこともあって、私はイギリスにいる間にホームシックにかかってしまいました。1日も早くここから抜け出して日本に帰りたいと切実に思うようになりました。故郷の平塚が恋しくて仕方がありませんでした。しかし、イギリスでは家庭や仕事を持っていたので、平塚に帰りたいという願いは簡単にはかなえられませんでした。

### 3. 日本人としてのアイデンティティの確立

ロンドンにはイギリス人の他にいろいろな国からやってきた人たちが生活をしていました。そういう人たちに囲まれた生活を長らくしているうちに、私は生まれて初めて「自分は一体、何者なんだろう？」と意識し始め、自分のアイデンティティ探しをするようになっていました。

アイデンティティとはちょっとむずかしいことかも知れませんが、自分が自分であることの証明ということです。「日本という国はどのような国なんだろう？」ということも気になり出しました。そんな時、「日本はきれいだし、日本人は公共心をもっていて、素晴らしいですね」という、日本を訪れたことのある人々の話を耳にして妙に嬉しくなったり、誇りに感じたりしました。そして気付いてみるといつのまにか、「自分は公共心のある日本からきた日本人なのだ」というアイデンティティが自分の中で形成されていたのです。

### 4. ロンドンの落書きが消えた — 行動した人がいたことに感動

イギリスでは長いこと経済的に悲惨で、公共の場も汚い状態が続いていましたが、ブレアー氏が首相になった90年代の後半より、少しずつ変化が現れてきました。それは、あのダイアナ妃が亡くなった頃でした。新しいお店が出来たりして街に活気が感じられるようになりました。

そしてその頃、私にとって驚くべきことが起きました。あの地獄のような落書きがすべて「消えた」のです。だれが、どういうきっかけで行ったのかは分かりませんが、いつの間にか地下道には明るい電灯がつけられて、あの落書きがあった場所には、美しいタイルを使ったモザイク画が施されたのでした。そして、その頃からはもうあの鼻をつくアンモニアの臭いはなくなり、しかも落書きの再発もぴたりと止まったのです。

変化はそれだけではありませんでした。地下道付近の芝生のスペースは常に途方もない量のゴミの山で埋もれていたのですが、落書きがなくなるとゴミもきれいになり、みずみずしい青さの芝生が現れるようになったのです。さらに芝生のまわりにはだらしない服装の若者たちが集団で夜遅くまでたむろしていて、危険な雰囲気がありましたが、彼らも忽然と姿を消して、夜でも地下道やその付近の道を安心して歩くことが出来るようになったのです。

これら一連の出来事に、私は非常に感動しました。どこの誰でしょうか、きっとあの汚いままではいけないと感じて、行動を起こしてくれた人がいたのです。そのことに胸を打たれました。そして、落書きが消えた後のまるで生まれ変わったような地下道を通るたびに感じたワクワクするような喜びは忘れられないものとなりました。このイギリスで味わった、①「落書きに対して行動をした人がいたことを知った感動」や、②「自分は公共の場を大切にする日本人」というアイデンティティ、そして③「故郷の平塚市への思い」がその後に結びつき合って、平塚市での落書き消しに至る「気づき」とか「原動力」になったのだと私は思っています。

### Ⅲ 1人の「気づき」がボランティア団体になる過程

#### 1. 帰国と気づき

1999年に10年ぶりに帰国する機会がついにやってきました。懐かしい平塚に着いた時には、「生きて帰って来られて本当に幸せ」という思いを全身で感じました。夢にまでみた故郷の地に自分の足で立っていることが信じられないくらい嬉しかったことを昨日のように覚えています。

ここでちょっと私の故郷、平塚市を紹介します。平塚市は神奈川県ほぼ中央の太平洋側に位置しています。東京からはJRでちょうど1時間のところです。江戸時代には東海道五十三次の宿場町として栄えました。平塚市には50年以上も続いている「湘南ひらつか七夕祭り」があり、囲碁の街（毎年10月に500面打ちがあります）としても知られています。

平塚市の生んだ有名な人を2人紹介しましょう。1人は「食道楽」という明治時代の大ベストセラーを書いた超人気作家の村井弦斎（1863～1927）です。彼はいろいろな料理法を紹介するとともに、「七日間世界一周」や「FAX」など、未来の社会の姿を言い当ててもあります。もう1人は囲碁棋士の木谷實（1909～1975）です。当時の囲碁の世界に新風を吹き込むとともに、木谷九段が平塚市の自宅（木谷道場）で育てた多くの弟子たちは現在の囲碁の世界で大活躍中です。

平塚市は気候が温暖で、川あり、山あり、海ありで自然もたくさん残っています。ホッとできる私の大好きなまちです。平塚市の主な商店街はJR平塚駅の北口に東海道線と平行に並んで2つあります。七夕祭りの中心の場所となるこれらの商店街は、駅に近い方は「パールロード商店街」、そしてもう1つは「スターモール商店街」と呼ばれ、近隣の市や町から買い物客が訪れるほどにぎわっていました。

バブル景気の時には、スターモール商店街に100本以上の茶色いポールで支えられたアーケードが取り付けられて整備された上、モニュメントポールと呼ばれる白い大きなポールが8本建てられました。久しぶりに帰ってきた懐かしい街、平塚市はすっかりきれいになり、隔世の感と同時に感激もひとしおでした。

しかし、帰国して2年ほどたった頃ぐらいから、なんとなく駅前商店街が暗くてさびれた感じがするようになりました。大型店舗が駅から離れたところに次々に出て始めたせいでしょうか、駅前の小さなお店がシャッターを下ろすようになり「空洞化」が起こり始めたのです。今では高層マンションが出来たり、チェーン店が進出したりして再びにぎやかになっていますが、その当時はかつてあった元気がすっかり感じられなくなっていました。それと同時に日増しにゴミや張り紙やたて看板が目に残るようになりました。そして、いつの間にか落書きの被害も目立ち始めたのです。アーケードを支えるポールにはサイン状の落書きが、そして空き店舗のシャッターには絵のような乱暴な落書きが描かれ始めました。私がかつて働いていた銀行のあたりも落書きの被害をかなり受けていました。この状態に私の年老いた父は、「これでは駅に行くにのちも、買い物に行くのにも落書きを見なくてはならず、憂鬱だ」と嘆くようになりました。

落書きを日々見ながら生活しているうちに、ついにこの落書きだけはどうしても我慢ができないという特別日障りに感じるものが現れました。それはスターモール商店街の中心の交差点にあるポールに描かれた日本語の落書きでした。その交差点には信号があり、信号待ちの時はその落書きがどうしても目についてしまい気分が悪くなる程でした。でも、私がこんなにも落書きに不快感を抱いて苦しんでいるのに、周りの人たちは全く関心がないようなので不思議でした。とくに小さな子どもを自転車に乗せているお母さんたちが、ちっとも落書きを気にしていない様子には驚かされました。自転車に子供を乗せて信号待ちをすると、落書きが子供のすぐ目の前にくるのに、そんなことはおかまいなしといった風だったからです。

## 2. 気持ちの変化

こんな光景を毎日目にしているうちに、だんだんと落書きを気にする私がおかしいのだろうかと不安になるほどでした。でも、父に相談してみると、「どこに、どういう落書きが描いてあるか覚えてしまうほどだ」と、父も落書きが気になって仕方なく感じていることが分かりました。落書きを見るにつれて、次第に他人のものを我が物のように汚す「落書きをする行為」を「許せない行為」と怒りすら沸いてきました。でもその半面で、「落書きをした人」に対しては「気の毒」という思いがありました。人間はもともときれいなものを好むはずだと勝手に思い込んでいたせいか、公共の物などを汚くして満足を得る人たちは、よほど心に「満たされない思い」を持っているのだろうと複雑な心境になりました。

すると、落書きに対しての「怒り」の矛先が、次第に「落書きを許している大人たち」に向かいました。それは自分自身を含めた大人たちです。私たち大人はみんなこの落書き問題に関わっていると思いました。だから、無関心でいてはいけなし、大人としての責任を果たすべきだとも思いました。でも、そんな偉そうなことを思っていた一方で、「いつかは誰かが消してくれるはずだ」という期待もありました。これだけ汚いのだから、きっと市役所が動き出して消してくれるにちがいないという思いもあったのです。

そして、その落書き消しが行われるのはきっと、300万人もの人出で賑わう七夕祭りの時かも知れないと思い始めました。そう思うとその年は例年よりお祭りが来るのが待ち遠しくなりました。ついに待望のお祭りが来たときには、この時とばかり飾りを見るのと同じくらい熱心にポールやシャッターの様子を観察しました。でも、露店が立ち並んだり、飾りが付けられたりして、あいにく見えず、はやる気持



ちを抑えてお祭りが終るのを待ちました。しかし、期待をふくらませて行ったお祭り後の商店街には信じられない光景がありました。落書きがなんと手付かずそのまま残っていたのです。この時、現実の厳しさを思い知り、ぼう然としてしまいました。

七夕祭りの時でさえ落書きが消されないとなると、「誰が」、「いつ」、落書きを消すのかという疑問が沸くのを感じました。すっかり意気消沈してしまい、七夕祭りが終わって半年くらいは落書きについて考えないようにと我慢を始めました。しかし、暮れが近づいたころ、我慢は次第に「行政に対しての苛立ち」に変わりました。「税金は一体どこに使われているのか」と思い始めたのです。

この頃、私は会社を辞めて自宅で英語を教えたり、米国公認会計士（CPA）の資格を取るための勉強をしたりしていました。そんなある日、「市長への手紙」というものを市役所で見かけました。それは所定の用紙に意見や要望を書いて送れば行政が検討するというものです。私はさっそく「落書きを消して欲しい」と要請することを思い付き、父に相談しました。すると、落書きが気になると言っていたはずの父の顔色は変わり、お上にたてをつくようなことをしてはいけない」と猛反対し始めました。理由を聞くと「そっとしておいた方が無難だ」と言うのです。私は「お上なんていう考えは今の時代には通用しないし、落書きが消されない責任は黙っている私たちにもある」と父を説得しました。

そのうち用紙に市役所の電話番号が書いてあるのを見つけたので、電話をかけることにしました。父は「お上が・・・」とおろおろしながら電話口までやって来て、これから話がどう展開するのかと私のことをじっと見守っている様子でした。

市役所に電話をかけて事情を話すと「係りの人に回しますのでお待ち下さい」と言われました。しばらくして電話に出た人にまた事情を話すと、今度は「担当が違うので」と言われ、再び電話を回されました。やっと担当者に電話がつながったので、辛抱強くまた同じように事情を話すと、「状況は分かりましたが、市役所は、落書きなんかは消しませんし、落書き消しをやっているボランティア団体なんかはないんですよ」という答えが平然と返ってきました。あまりにそっけない回答に拍子抜けしてしまいましたが、これで引き下がったらこの先もずっと落書きを見なければならぬという思いに駆られて、思い切って「落書きけしの仲間を集める方法を教えてください」と尋ねてみました。しかし、返ってきた返事は「仲間なんかはそうそう簡単に見つかるものではないんですよ」でした。この返事を聞いた時にはさすがにカチンときてしまいました。父も予想外だったのか、この結果にあっけに

取られていました。もうこれでお終りかと思った時に、「もし良かったら、市役所に市民活動推進課があるから来てみてください」と言ってくれました。私は翌日、一縷の望みを持って平塚市役所に出向きました。

市役所の市民活動推進課を訪れると、応接間のようなところに通されました。市役所にこんな部屋があったのかと物珍しそうにしていると、職員の方の説明が淡々と始まりました。その説明を聞いて、「行政とはこんなにも市民から遠いものだったんだ」ということを初めて思い知りました。

話の内容はこうです。①行政の財政は「予算」で成り立っていて、「予算」は会計年度の初めに組まれてしまうので期の途中で変更はできない。②予算は「市役所」が決めるのではなくて、「議会の議員」が決めるので「市役所」は関わることは出来ない。③ボランティア団体はたくさんあるので、「落書き消しだけに協力はできない」ということでした。よくよく聞いてみれば、あれも出来ないこれも出来ないというだけの説明でした。

では一体どうしたらよいものかと途方に暮れていると、職員の方が藤沢市で行われた落書き消しの新聞記事を1枚くれました。そして、「今週末に忘年会がある平塚のボランティア団体があるので、そこにでも行ってみたらどうですか？」と言って連絡先もくれました。その忘年会にはNPO（民間非営利組織）を立ち上げたり、様々な活動で中心的な役割を担ったりしている方たちが集まるというのです。

藁にもすがりたい気持ちにかられた私は、もらった新聞記事を片手に忘年会に参加をし、その記事を見せながら「駅前商店街の落書き消しをしませんか？」と声をかけてみました。今から思い返せば忘年会の参加者たちは、突然やってきたよそ者が落書き消しの話をするので、さぞかし驚いたことだろうと思います。でも、大きなストーブを囲みながら飲んだり食べたり、ギターの音にあわせて和やかに歌ったりしている最中に、そんな話をする私を、みんなは「すごいですね、頑張ってくださいね」と笑顔で迎えてくれました。しかし、残念だったことは、最後まで居残ったのに、「では、一緒にやりましょう」と言ってくれる人が誰も現れなかったことです。そのことについて嘆いていると、突然、私の前にいた50歳ぐらいの男性が、「あなたのものの頼み方は間違っているんですよ」とお説教めいた話をし出したのです。初対面なのにすいずん失礼なことを言う人だなと眉をひそめたい気分になりました。でも落書きを消したいという気持ちの方が勝っていたので、その人の話に耳を傾けました。じつは、この人との出会いが私の運命を変える出会いとなったのです。

後から聞いた話によると、建築の専門家だったその人は、大事故にあって車椅子の生活を余儀なくされたそうです。でも、一命を取りとめたという感謝の念から、突然の運命を逆に活かそうと決め、高齢者など体が不自由な人たちのための住宅設計を手がけるNPOを自力で立ち上げたのだそうです。

彼はその日、自分の体験から学んだコツを2つ教えてくださいました。1つは人にものを頼むときに使う言葉使いでした。人に何かをやってもらいたい場合は、「なに なにをしてくださいませんか？」と言うのはダメだそうです。そういう場合には「なに なにをさせて下さい」というのだそうです。そして、もう1つは、仲間を見つける方法でした。落書き消しの仲間を見つけないのなら、まずは自分1人で落書きを消すという「行動を取ること」だということです。1人で行動しているといつの間にか仲間が出来るものだ、とのことでした。

これらのコツを聞いてなんだか目の前がパッと明るくなるような思いになりました。そして、その人の言った「行動を取ることだ」という言葉に背中を押され勇気をももらったような感じがしたのです。

### 3. 1人で行動をとる

忘年会でもらったアドバイスに従って、さっそく行動を取ることにしました。まずは1人で落書きを消すために、近所のペンキ屋さんを訪れ、「落書き消しの道具を売って下さい」と頼みました。ペンキ屋の社長夫婦は私の話を聞いて最初はあつけにとられていましたが、そのうち若い社員たちを呼び寄せて、熱心にカタログを見せてくれたり、道具や溶剤の説明をしてくれたりしました。その後、何度も店を訪れる私に、「これじゃあ、あまり商売にならないね」と言いながらも、お店ぐるみで応援をしてくれました。

次に訪れたのは藤沢市、湘南台の市民センターでした。グループでの落書き消しの体験談を聞こうと、平塚市役所でもらった1枚の新聞記事をたよりに湘南台公園で落書き消し活動の中心役を務めたセンター長さんに会いに行きました。センター長さんは忙しい仕事の合間に私のために手を止めて、親切に対応をしてくれました。センター長さんの人柄が素晴らしく、心温まる経験となりました。

その後は、毎日の生活で仲間づくりのため1日あたり5人に落書き消しの話をしようという目標をつくり、近所の人たちや、お店の人たちなどに話しかけて、落書きのことについてみんなにもっと気にかけてもらうようにしました。最初のうちは反応があまりなく、「いいことですね」と言ってくれる人がたまにいます。

しかし、そのうちに「落書きなんかを消したら殺されちゃうわよ」とか、「みんなで落書きを消すなんて平塚では絶対にムリなんだから」などという人が出てきました。その理由はと聞いてみると「なんとなく危なそうじゃない」とか、「平塚の人は他の場所の人と人間自体が違うのよ」など根拠がないものばかりでしたが、そういう話を聞く度に私がやろうとしていることは間違っているのかも知れないと動揺したものでした。

でも、マイナスのことはすべて「解決すべき宿題」としてメモをとり、すぐにプラス思考に切り替えて、その後もいろいろな人たちと話を続けました。すると次第に、「このことだったら、あの人が良く知っているよ」とか、「あそこのお店にいくと情報がもらえるから紹介をしてあげるよ」という人たちが現れて人の輪が徐々に広がりました。そのような中、近所で塾を開いている先生が、詳しい話を聞きたいと他の知人とともに私の家に来てくれました。この先生たちが最初に私の話に熱心に耳を傾けてくれた人でした。熱心に話を聞いてくれた人たちの存在があらたな自信につながって行くのを感じました。

私は、外国に長く住んでいたこともあって、日本語がすらすらと出て来なくて引っ込み思案になっていました。でも、落書き消しをしたいという一心で、どんどんと多くの人たちと関わるようになると、だんだんと人と関わることの楽しさが分かってきて、積極的な性格に変わってきたことに気がつきました。

こんなある日、「行動をすること」の大切さを教えてくれた人が、清掃会社を営んでいる友人を紹介してくれました。清掃のプロのマンツーマンの落書き消しの指導は願ってもない有り難いことでした。彼が平塚に駆けつけてくれた日は身を切るような冷たい風が吹いていた上に、あいにく風邪を引いて辛そうでしたが、それでも嫌な顔ひとつ見せず、駅前商店街を歩きながら、さまざまな素材に描かれた落書きの消し方を1つ1つていねいに教えてくれたのでした。私は彼の手に掛かって落書きが次々と消えていく様子を目の当たりにして、話だけで知っていることと、実際に見ることには大きな違いがあり、まさに百聞は一見にしかずだと思いました。

私は感謝の気持ちで一杯になり、どうお礼をしたら良いのかと迷ってしまいました。するとその人は私の気持ちを察してくれたのか、「僕は災害時に仲間と一緒にオートバイで救援物資を運ぶNGOのメンバーなんです。お役に立てて嬉しいのはこちらの方です」と自らの活動の話をしてくれました。その話を聞いて、自ら進んで人の役に立とうとする彼の姿勢に強く心を打たれました。

この日はたくさんのことを教えてもらうことが出来、今までの知識を整理するこ



とも出来ました。まず、第1は必需品のこと。落書きを消すためには、最低でもマスク、手袋、ブラシ、溶剤、ボロキレ、小分けビンという道具が必要だと教えてもらいました。第2は落書きと一口にいても、書かれた素材や色などで消し方が違うこと。第3は落書きには種類や意味があること。そして第4は、落書きを消すためにはまず落書きがかかれたものの所有者を見つけて、その所有者の許可をもらわなければならないことです。教えてもらったことはすべてカセットテープにとり、後に何度も聞き返しながら、本当に有意義で素晴らしい1日だったと思い返しました。

その後、他の方たちのアドバイスで、グループで消すためには、①「組織づくりの方法」、②「資金づくりの方法」、③「街を元気にするまちづくりの方法」—これら3つのことを知っておくべきだと分かりました。落書き消しを通じて社会のしくみとか、人間の心理とか、平塚市のこととか、まちづくりのことなど、たくさんのことが分かるようになると、なんだかもっとももっといろいろなことを知りたいと思う好奇心が沸いてくるのでした。

落書き消しの原動力は、最初のうちはどちらかと言えば「怒り」や「苛立ち」といったマイナスの気持ちでした。でも、たくさんの人に巡り合い、情報が集まるにつれて、いつの間にか「楽しい」とか「面白い」というプラスの気持ちが原動力に変わりつつあることに気付きました。それらの気持ちの根底には常にロンドンで感動した体験だとか、平塚市への思いだとか、自分が公共心をもっている日本人だといったアイデンティティがあったのだと思われます。

道具については次のような自分なりの研究をして、どのようなものがボランティアの落書き消しに向いているのかを見定めることにしました。そして、道具がほぼそろったある日、思い切って駅前商店街の落書き消しを実際に行うことに決めました。いざバケツに落書き消しの道具を入れて目的の場所に向かうと、胸が高鳴りました。商店街の理事長さんからは、あらかじめ商店街の落書きを消してもよいという許可をもらっていました。その許可をもらう時にも自分がなんだかとても大胆なことをしているのではないかと感じられてドキドキしました。また、まったくの素人の私に落書き消しの許可することに、理事長さん自身もかなりの責任を感じていたのではと思うと、ありがたいと思う気持ちと申し訳ないと思う気持ちが入り混じった心境になりました。不慣れな手つきで初めての落書き消しをしていると、私に気付かれないように、近くの薬局で働いていた薬剤師さんが心配そうな面持ちでそっと私を見守ってくれているのがわかりました。その人の姿が目に入った時にはじんとしたものです。



「ボランティアは仕事じゃないから気楽でいい」と聞いたことがありますが、初めて落書き消しを行った時の心境は不安という波が押し寄せてくるといった感じで、気楽なんていうものでは決してありませんでした。落書きを消している間は孤独で泣きたいような、逃げ出したいような気持ちでした。こんな気持ちは今まであまり味わったことがありません。どうしてそんな気持ちになったのかを後で冷静に考えてみたら、きっとこんなことではないかと思えてきました。私が毎日行っていることは「安全なこと」、つまり「最初から結果が分かっていること」ばかりではないかということです。だから、安全なレールからはずれるような「結果が分からないこと」を行ったことで、「未知という不安」が襲いかかってきたのだと思います。

初めての落書き消しの結果は、商店街の理事長さんやペンキ屋の方々が、優しくほめてくれました。でも、家に帰って父に話すと「心配だから見に行つて来る」と言って出かけてしまいました。そして、帰ってくるなり「消したあとがあまりに汚すぎる。あれでは逆に汚してしまったようなものだ」とはつきり言うのです。

その言葉に頭をガーンとたたかれたような気持ちになりました。その晩は眠れそうもなかったので、懐中電灯を持ってとぼとぼと落書きを消したあとを見に行きました。あらためて、落書きを消したところを見てみると本当に汚くて我ながらびくくりしました。「大失敗」したことが分かり、情けなくて暗い気持ちで一杯になりました。でも気持ちを落ち着かせて、目をそむけたいという思いにかられた失敗したところをじっくりと観察することにしました。こんな時は、何がいけなかったのかとか、どうすればもっときれいに消せるのかと考えることが一番だと自分に言い聞かせました。しばらくそこにたたずんでいるうちに、気持ちが前向きになり、「もっときれいに消せる方法があるはずだ」と思えるようになりました。そう思うと、「もっと腕をみがいて、もっときれいに消せるようになりたい」という気持ちが心の底からじわりと沸いてくるのを感じました。

落書き消しの実践は孤独との闘いでしたが、それとは対照的に情報収集作業は、たくさんの人たちに支えられました。情報をくれた人たちは、明るくて気さくな人ばかりでした。電話の応対も丁寧で、今の世の中にもこんなにも親切でしかも人間味のある人たちが実際には大勢いるのだということに気付かせてくれました。そして、人助けをする人たちに触れるたびに、その人たちが持つ「心の豊かさ」が伝わってくるような感じがしたものでした。

インターネットやメーリングリスト（ML）も積極的に使って意見交換をしまし

た。落書き消しの様々なことが分かった時点で、実に多くの人たちとの出会いがありました。出会った人たちは私の「普段の生活」ではとても自分とは関わり合う接点が見つかりそうもないような人たちばかりでした。

ある日、メールを開いてみるとまちづくりの先輩から「関西ペイント（平塚工場）にも声をみたら」とアドバイスが届いていました。さっそくどんなものかと電話を掛けて落書き消しへの興味を尋ねてみると、社員の方は今すぐに落書きを見せて欲しいとタクシーを飛ばして商店街に来てくれました。そして、一緒に商店街の落書きをつぶさに見て回った後は、グループで落書き消しをしたいという私の話にじっくりと耳を傾けてくれたのです。私は「企業の目的は利潤追求だけ」だと思い込んでいたので一連の対応を不可解にすら感じましたが、その疑問はすぐに解消しました。関西ペイントの社員の方はこんなことを教えてくれたのです。

「今の時代は、企業は地域に貢献して、地域とともに生き延びていく、そういう時代なんですよ」と。この話を聞いて「企業の社会的責任」という新聞で見かけた言葉を思い出しました。そして、実際そのことを実践しようとする志を持った企業が地域にあることを頼もしいと思いました。でも、この時点ですぐに協力をいただくまでには至らず、私は再びひとりぼっちの行動を続けなくてはなりませんでした。その間、どうしたらもっときれいに消せるのだろうと、いろいろと実験しているうちに手のひらを化学火傷してしまったり、自分がとんでもないことをしでかしているのではないかと、という不安でつぶされそうになったりもしました。

おまけに、この頃から私のことを批判しはじめる人たちが現れました。一部の人たちは私のことを「外国帰りの変わり者」とか、「出羽守（でわのかみ）」と呼び始めたのです。それはきっと、私がロンドンでは落書き消しが成功したとか、藤沢では落書き消しに350人が集まったなどと、「～では、～では」と連発したことが原因のようでした。

こういう批判の声を耳にするにつれて、いよいよ自分は周りの人たちから試されていると感じるようになりました。落書き消しのグループをつくると言い出した言い出しっぺが本当に有言実行するのかと、周りの人たちの目が厳しさを増してきたように感じられました。そのため、たとえ壁にぶつかっても、決してあきらめることは出来ないというプレッシャーがかかり、孤独感が更に募りました。

私がどうしても消したいと思っていた落書きは、人通りの多いスターモール商店街にある白や茶色のポールに描かれた「サイン状の落書き」でした。しかし、大きさが縦50センチ横25センチくらいのものをいくつか消してみても初めて1つ消すのに

平均40分もの時間がかかることが分かりました。おまけに作業は考えていたよりもはるかに重労働だということです。消し終わったときはいつもへとへとでした。また、費用については落書き1つあたりおよそ500円が掛かることも分かりました。

落書きは、1つでも消すことが大変なので、一体いくつあるのだろうと思い、ざっと数えあげたところ、茶色いポールに約60個、白ポールには約40個で、合計で100個以上もの落書きがスターモール商店街にあることが分かり、いっぺんに気が遠くなるのを感じました。自分がしようとしていることが突如、大それたことに感じられて、思わず道路に座りこんでしまいました。

道路に座って改めて商店街を見渡すと、長く続いている商店街の端のほうまでずらりと落書きがある様子が一望できました。こんなにもあったのかと気付くと、1人で全部消すなんてとうてい不可能だと悟りました。それと同時に、グループで落書き消しをするために解決しなくてはならない問題が山積みになったままであることに気付いて、ピンチが訪れたような感じになりました。頭の中は大混乱しましたが、そういう時は頭の中を整理するため紙に書き出すことが良いと聞いたことがあったので、その晩は机に向かってこれまで取ったメモに目を通して、解決しなく



商店街のシャッターなどにも心ない落書き

てはならない問題をノートに1つひとつ書き出しました。書き上げてみたら問題はだいたい次のようになることが分かりました。

グループでの落書き消しをするにあたって解決しなければならない問題

- ①参加者が怪我をした場合の補償 ボランティアにも保険制度はあるのか？
- ②トルエンの保管場所（可燃性が高い危険物で、しかもオロナミンCのボトル1本分で数千円ぐらいの市場価値があるとのことで盗まれる可能性も高い。）
- ③落書きを消したら仕返しをされるなどの危険が伴う可能性について（落書きは暴走族などの縄張りに関係するという説もあるから）
- ④体に有害な溶剤を吸い込まない方法
- ⑤再発するとしたら、落書きを消す意味があるのか？
- ⑥「平塚市の人のはのんびりしている、問題意識が薄い」と言われている中で、仲間を集める方法
- ⑦道具や溶剤などの購入資金を集める方法
- ⑧歩行者の安全を確保する方法

このように、問題はいくつもありましたが、それでもどうしても落書きをみんなで消すことが出来たらという思いに揺るぎはありませんでした。あきらめずに問題の解決方法をひとつずつ探っていこうと決め、「どうしよう」とは悩まず、「どうしたらよいのか」と考えるようにしました。そして問題を解決するため、以前訪れたことのある人のところに再び足を運んだりしながら、「ピンチはチャンスだ」という言葉を自分自身の励ましにしました。すべての問題を解決するにあたっては結局2ヵ月も掛かってしまいましたが、「解決の手がかり」は、いつも私に手をさしのべてくれた人たちが持っていたことが分かりました。その人たちは私が前を向いて進んでいったことで、巡り出会えた人たちでした。私は多くの人たちに「助けてもらった」のです。

解決しなくてはならない問題の解決策

- ①参加者が怪我をした場合の補償・・・ボランティアにも保険制度はあるのか？

【解決策】平塚市役所の市民活動推進課より回答がありました。ボランティア保険を市役所の予算で掛けてもらうことが可能だと分かりました。以前はあれもこれも出来ないと言っていた市役所でしたが、私が具体的な内容の相談をす



ると、それに応じた回答を的確にしてくれました。

②トルエンの保管場所（可燃性が高い危険物で、しかもオロナミンCのボトル1本分で数千円ぐらいの市場価値があるとのことで盗まれる可能性も高い。）

【解決策】商店街の文房具屋さんが安全な場所の提供をしてくれました。また、落書き消しの道具のために鍵がかかる倉庫も貸してもらえることになりました。

③落書きを消したら仕返しをされるなどの危険が伴う可能性について（落書きは暴走族などの縄張りに関係するという説もあるから）

【解決策】落書き消しを成功させた高校の先生方とのお話から回答を見つけました。落書きを描く人たちは意外と気が小さいとのこと。大勢の人がグループで落書きを消していることをマスコミやポスターなどで知ると怖くなって自ら進んで落書き消し活動に参加する傾向もあるのだそうです。落書き消しに賛同する団体名を連ねて報道することの効果は抜群だということを教えてくれました。

④体に有害な溶剤を吸い込まない方法

【解決策】落書き消しを成功させた藤沢の市民センター長のお話から解決の手がかりを見つけました。原始的な方法ですが、風上で活動したり、うちわや扇風機を使ったりすることで、吸引の可能性を小さくすることが出来るそうです。また、交代制にして1人当たりの作業時間を短くすることも効果的だとのこと。また、関西ペイントから危険物取扱免許を持った社員の指導やマスクの提供をして頂くことが可能になりました。

⑤再発するとしたら、落書きを消す意味があるのか？

【解決策】落書き消しを成功させた高校の校長先生のお話に回答を見つけました。生徒たちの落書きを消しぬいた結果、最終的には落書きの再発がゼロになったという体験談を話してくれました。再発しても直ぐに消せば再発率は確実に低下すると太鼓判を押してくれました。落書きを描いた者は自分が描いた落書きが消されることに恐怖を感じる心理があるそうです。公共物を汚すことはいけないことだと、大人たちが「言葉」ではなく、落書きを消すという「態度」で示すことが大切だとのこと。また、銀座などのきれいなところでは、落書きは描かれないことが知られているので、ゴミや張り紙などもなくしてみんなが街をきれいに保てば、再発を防ぐことは出来ると教えてくれました。

⑥「平塚市の人のはのんびりしている、問題意識が薄い」と言われている中で仲間をどうやって集めるのか？



【解決策】平塚市で実際にNPOを立ち上げた方々からのお話から回答を見つけました。「常識は破るもの、変えるもの」だそうです。平塚市でもNPOを立ち上げて活躍している問題意識を持った方が大勢いるとのこと。落書き消し活動と平塚市で行われる様々な活動、例えば福祉活動、総合学習、街の行事、大学生の活動などとの共通点を見つけて、それらの活動範囲に落書き消し活動を組み入れられるような工夫をすれば、市民の参加を呼びかけることも出来るし、意識を変えることが出来るのではとのことでした。落書き消しの「効用」にも着目し、犯罪防止、防災対策などにもよい影響があることをアピールしたり、「まちおこし」として市民の関心を集めたりするのも1つの方法だそうです。でも、一番大切なことは1人でもいいから「行動する」ことだそうです。行動すれば、仲間は自然に集まってくるとのことでした。

⑦道具や溶剤などの購入資金を集める方法

【解決策】他の市民団体に属している人たちから、街頭募金、助成金、郵便振替用紙を使つての寄付金募集という方法でお金を集めることができると教えてもらいました。道具などは寄付をしてもらったり、借りられるものは極力借りたりようにすることにし、寄付をしてくれる先や、道具などを貸してくれる先を見つけました。また、落書き消しに賛同してくれるお店を見つけ、そのお店の売り上げの一部を寄付してもらうこととなりました。

⑧歩行者の安全はどうやって確保するのか？

【解決策】市役所や商店街から、「コーン」と呼ばれる三角の置物を落書き消し活動中に置いたらどうかという提案がありました。コーンは特別に貸してくれるとのことでした。また、参加者に誘導係になってもらうという案もあり、誘導係りの経験のある人たちの協力を取りつけることが出来ました。

#### 4. 仲間がうまれる

一番むずかしいと思われたのは、実際に活動する仲間をつくることでしたが、意外なことでそのきっかけをつかむことができました。それは商店街の方が私から何度も落書きの話を聞いているうちに「落書きが気になる」と、「気づいたこと」が始まりでした。その方は文房具店のご主人でした。ついに「知っている人たちだけにでも声を掛けて、落書き消しをしてみようよ」と提案をしてくれました。「誰も来なければ、その時は2人で消そう、だめもとでやってみようよ」と言ってくれたのです。なんと頼もしい発言でしょう。

私は勇んで、知っている人たちに声を掛けて、実行日の朝を待ちました。それは2月の終わりに近い日曜日で、始まりは10時でした。しかし、当日の朝になって突然我に返り、こんなに寒い冬のお休みの朝に落書きを消そうなんて思う人なんか本当にいるのだろうかとすっかり弱気になってしまいました。

そんな気持ちでいたので、遠くから人影がポツリ、ポツリと現れて私たちの方へ歩いてくる様子が見えた時は、信じる事が出来ませんでした。あっという間に仲間が3人やってきて5人になりました。3人のうちの1人はなんと私のことを「外国帰りの変わり者」と悪口を言っていた人で、もう1人は厳しい内容のメールを私に送ってきた人でした。その人たちがわざわざ休みの日の朝に笑顔で出て来てくれました。人間の心理は不思議だと思いました。マイナスの関心はプラスの関心に反転することもあるのだと分かりました。春休み中の大学生も来てくれて、最初のグループでの落書き消しは5人でスタートしたのでした。

みんなにとって落書き消しは初めてとのことだったので、私が先輩として指導することになりました。参加者した人たちは初対面だったのですがその場は和やかな雰囲気包まれ、活動するに従って「手袋の中がヌルヌルになった」とか、「なかなか落とせない」とか、にぎやかになって行きました。「日本人は恥ずかしがり屋で、知らないもの同士ではあまり言葉を交わさない」とよく聞きますが、何か1つの目標に向かってみんなで力を合わせている時は例外なんだなと思いました。落書きが消える頃になるといよいよ全員の思いが1つになって、消えた時には思わず「やったあ！」とみんなで手を叩いて子どものようにはしゃいでしまいました。この活動を通して初めて、落書き消しは「みんなで行くと楽しいものになるんだ」という思いがけない発見をしました。そして、「達成感1人で行動するときの何倍もあること」も。

アンケートを取った結果、参加者全員が「また参加したい」と書いてくれたこと

で、このたびの落書き消しは成功したと思いました。その上、「ブラシは力が入るものがないのでは」とか、「手袋はもっと通気性があるものがないのでは」といろいろな提案が出てきてアイデアがぐんと広がった感じがしました。「三人寄れば文殊の知恵」というように、人が集まると知恵も集まるものなんだと感心しました。また、グループで落書き消しをしていると、「こんなところで何やっているの?」と小さな人ばかりが出来、人が人を呼ぶことにも気付きました。嬉しいことに「僕にも落書きの消し方を教えて!」と、瀬戸物屋の元気なおじいさんも現れました。また、「写真を撮ってあげるよ」と積極的に写真を撮ってくれる人も出てきました。これで、仲間はさらに2人増えて合計で7人となりました。

## 5. 「平塚をみがく会」の誕生

この体験を通して自信がついたので、1ヵ月後の3月23日に20人ほどが入る市民のための会議室を予約し、落書き消しに関心がある人たちを集めて、「みんなで落書き消しをしよう」という集まりを開くことにしました。

この会議の立案と実行にあたっては、ある大企業に勤めているビジネスマンの理解と協力が大きな助けとなりました。この方は、会社ではISO14001（環境マネジメントシステム）の審査などの仕事に携わり、私生活では長年にわたって地域活動に貢献している方でした。現在「平塚をみがく会」の会長を務めてくださっている彼の存在は、市役所の市民活動推進課を通じて知ることが出来ました。日本のビジネスマンというと平日は仕事におわれて、休日は家でごろ寝をしている「会社人間」というイメージが常にありましたが、彼は違っていました。これからの社会では、「仕事」と「家庭」と「地域活動」の3つのバランスを上手に取ることが理想的とされるのだそうですが、彼こそは誰よりも早くこのバランスの大切さを見出して、みごとに実践していた人でした。

会議の当日は肝心の参加者が集まらなかったらと思うと、不安になりました。しかし、会議が始まる頃には関西ペイント、市役所、商工会議所、商店街、市民団体などから次々と人が集まって、用意した席はすべて満席となりました。参加者の中には市議会議員や教師や小学生もいました。

参加者が集まると今度は会議がうまく進まなかったらどうしようと不安が襲ってきましたが、会議を開くことに賛成してくださった方が会議の進行を非常にスムーズに行ってくれました。私はこの時も「助けられている」ことを強く実感しました。

会議では、落書きの写真などを参加者の方々に見てもらいながら、落書きの被害

のひどさを訴え、落書きの意味、種類、落書きを描く人たちの心理、再発の防止の仕方などの説明を加えました。あまり上手に話が出来たとは思っていませんでしたが、「こんなに落書きにこだわっている人を見るのは初めてだ」という声が聞こえてきたので、一生懸命さだけは伝わったという手ごたえを得ました。

話の最後に、2月に5人で行った落書き消しの体験談を話し、「協働しませんか」と声を掛けました。すると、会議はいろいろな話題で盛り上がった末に、「落書きを消す会を作って落書きを消そう」ととんとん拍子に決まり、会に名前をつけようということになりました。「平塚をぴかぴかにしたい」という意見をきっかけに、「平塚をみがく会」という名前が選ばれると、ユーモアあふれる名前にみんなの顔が思わずほころんでしまいました。

「平塚をみがく会」が誕生した経緯は以上のとおりです。最初の会議の場でこうした会が出来あがるとは思ってもいなかったもので、最初は戸惑いました。でもだんだんと「平塚をみがく会」は、立場はバラバラで違うけれども、「平塚をきれいにしたい」というみんなの思いは一つ」であるということの象徴とか、「平塚もそんなに捨てた街ではない」ということの証とかにも思えて、会が出来たことで感無量になりました。

会の出来あがった過程を知って、「行き当たりばったり」という印象を受ける人がいるかも知れません。でも、新しいことを始める時は、頭だけで考えていてもダメなようです。思ったとおりには事はうまく運ばないばかりか、予想外の出来事に対処するためにその場、その場の対応が重要になることが実際の体験からよく分かりました。ですから、何か新しいことを始めるために、大切なことはその思いを持ち続けながら、まずは「行動すること」、そして壁にぶち当たっても、とにかく「あきらめないこと」ではないかと思いました。また、時には「レールから外れる勇気」も必要だということも学びました。

#### Ⅳ 「平塚をみがく会」の活動

「平塚をみがく会」という落書き消しの会が出来ると、活動の目標を作ろうということになりました。会議のちょうど2ヵ月後の5月20日には、サッカーのワールドカップのためナイジェリア・ナショナルチームを平塚に迎えるので、その前に落書きを消すのはどうかという具体的な意見が出ました。2ヵ月という期間はとても短すぎると思われたのですが、みんなの気持ちが1つに盛り上がっていたので、とにかくやってみることに決まりました。

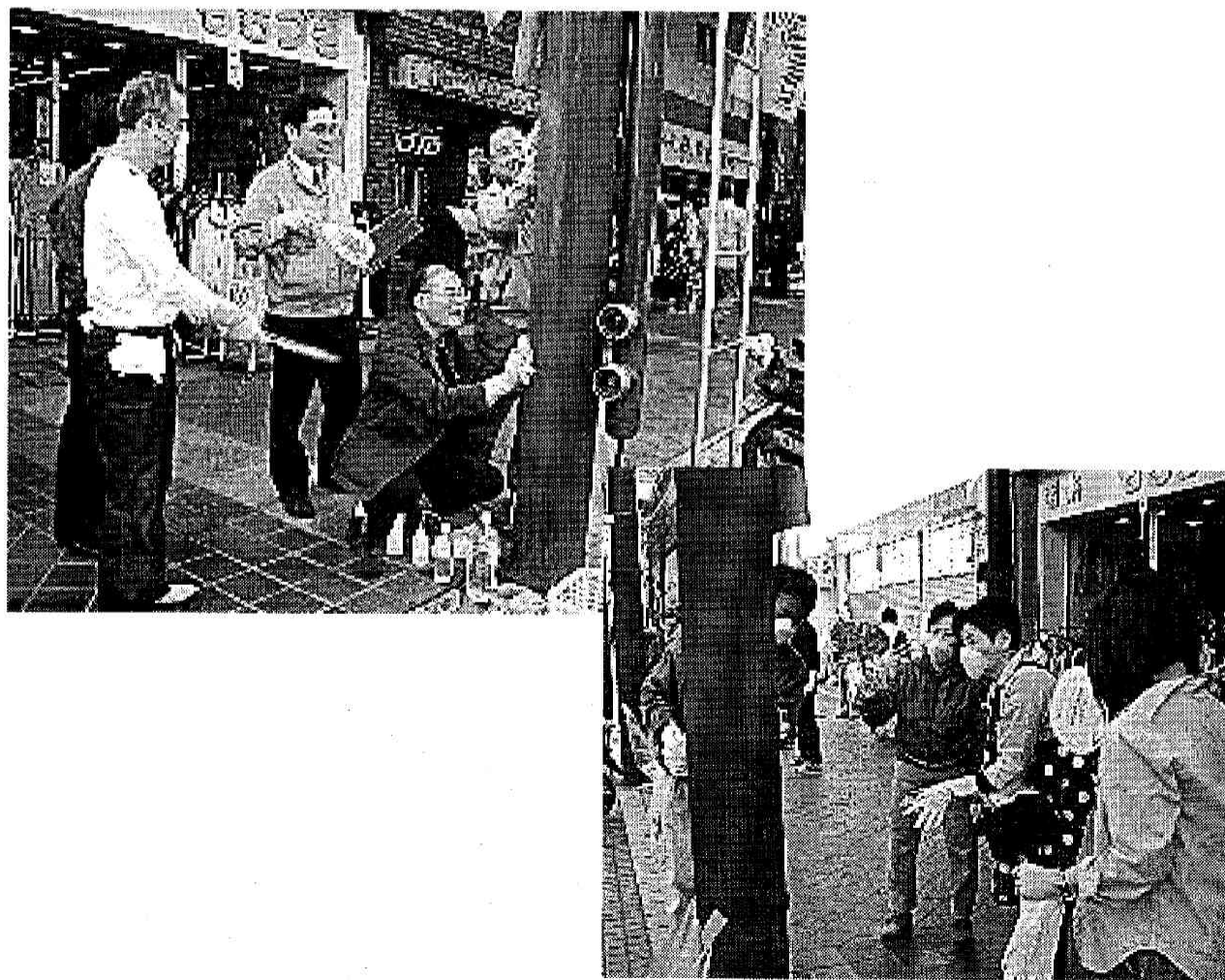


会議の2週間後にはさっそく、20人ほどが集まって、ボランティア団体として初めての落書き消しをしました。

### 1. 初めての落書き消し

「平塚をみがく会」として初めての落書き消しは、素人の私が考案した方法で試行錯誤により行われました。溶剤を吸わないようにするため、団扇であおいだり、参加者を「商店街チーム」、「女性チーム」、「若者チーム」などのグループに分けて、「早さ」や「きれいさ」をゲーム感覚で競い合うことにしました。するとまるで「お祭り」のように和気藹々笑いが溢れる活動となりました。なかなか消せない落書きには苦勞しましたが、苦勞を共にした経験によって、団結しようと思う気持ちが強まって、苦勞が思いがけないプラスの効果を生み出しました。

この日は、活動後のお茶のひとときにもみんなで落書き消しの話で盛り上がり、



「商店街チーム」や「女性チーム」が競い合うように落書き消しに挑戦



若い方たちが自分たちのネーミングは「みがきたい（隊）」がいいなあと言うと、女性たちは、それなら私たちは「きらめきたい!」「美しくなりたい!」がいいわねと会話に弾みがつきました。ついでに退職をした方たちには「光りたい!」「輝きたい!」という名前をこっそりつけたりしました。

この日の活動を通して、長い間意見が対立したまま口をきかなかった人たちが仲直りをしたと聞きました。実は、地域の人たちが集まって行う落書き消しには、犯罪を防いだり、災害時に備えてのネットワークづくりになったり、青少年の育成になったりといくつかの効用があることを知っていましたが、その上に、昔のお友達が仲直りするきっかけづくりにもなるとは夢にも思いませんでした。こんなにたくさんいいことがあって、おまけに街はきれいになるのだから、落書き消し活動ってすごいんだなあと改めて思いました。

翌日にはこの日の活動が思いがけず写真入りの新聞記事となっていました。記事を見ては嬉しくて、みんなで喜びをかみしめました。活動が報道されたことにより会員たちのやる気にいっそう弾みがついて、その次の落書き消し活動の時までに、落書き消しに関心を持つ人たちが雪だるまのように増えていたのです。

## 2. 2回目の落書き消し

2回目の落書き消し活動は4月の終わりに行われました。その時の参加者は前回の3倍近くになっていました。集合場所は私がかつて働いていた銀行の前でした。この日は車椅子の方や小学生も落書き消しのための募金活動に参加してくれました。落書きを消している最中の募金活動は効果抜群で、「落書き消しに参加をしたいけど、時間がないのでせめて募金だけをさせて下さい」と言う人も出てきて、1日で5万円近くも集めることが出来ました。

気付くと以前の落書き消しの活動の際には1度も姿を現さなかった私の父が募金箱の近くに立っていました。父は「落書き消しに参加することは体力的には無理だから」と言いながら、全部の募金箱に少しずつ何度もお金を入れていました。父は私から落書き消しの話をさんざん聞いていたのでなんとか自分なりに参加をしたかったのでしょう。この日は願ってもないことに、関西ペイントからは、特殊溶剤の全面的な提供のみならず、危険物取り扱いの免許を持った専門家の派遣がありました。これはきっと、前回の落書き消しの際の参加者の苦労と熱意が伝わったせいでしょう。特に若者たちの活躍ぶりには目を見張るものがありました。

今回は専門家の人たちを中心として落書き消しのチームを編成したことにより、

参加者全員が、専門家から落書き消しの仕方を直接指導してもらえるとという貴重な体験を得ることが出来ました。そして、この日は、提供を頂いた魔法のように落書きを落とす特殊溶剤とやる気に満ちた参加者の根気が相まって、あれ程たくさんあったスターモール商店街の落書きを全て消してしまったのでした。こんなに早くスターモール商店街の落書きが無くなってしまおうとは誰も予想していなかったと思います。まさにハッピー・サプライズの1日でした。

### 3. 3回目の落書き消し

3回目の落書き消しは、パールロード商店街の空き店舗のシャッターに描かれた落書きを消そうということになり、ゴールデンウィーク中に活動が行われました。この期間は通りがかりの人など誰もが手軽に参加が出来るようにとその場で「落書き消し講座」を開いたり、道具の貸し出しを行ったりしました。

実は、この活動の前に、あらたな問題が私たちを悩ませていました。関西ペイントから提供を頂いていた特殊溶剤も私が手元に持っていた数々の溶剤もシャッターには強すぎて、表面の塗装を溶かしてしまうことが分かり、みんなで頭をかかえていたのです。

そんな時、ほんとうに偶然としか思えないのですが、シャッターの落書き消しにぴったりの溶剤を、しかも大量に提供してくれるという人が現れました。その人は張り紙をはがす溶剤などを販売する会社の社長さんで、私と同じくらい落書き消しに「こだわり」をもっていた方でした。「平塚をみがく会」の新聞記事を見て以来、落書き消しの活動にどうしても参加をしたいと思っていたそうです。私たちは運までもが味方をしてくれたと不思議な思いになりました。この活動にはお店の従業員を始め、地元の高校生、家庭の主婦、友人など様々な人たちが参加してくれて、シャッターに描かれた落書きをほぼ全部消すことが出来ました。

### 4. 再発防止のペンキ塗り

「平塚をみがく会」が出来てから1ヵ月半がたった頃には、早くも平塚駅前商店街の落書きがほぼ完全になくなった状態になりました。すべてがとんとん拍子に進みましたが、私たちには落書きとの闘いはこれからだという気持ちがありました。ナイジェリアチームがやってくるまでのあと半月が勝負だと気持ちを引き締めていたのです。

なぜなら、落書きがなくなると同時に、新たに取り組むべき課題として、落書き

の「再発防止対策」が出てきたからです。落書きを消したあとが少しでも汚かったりすると、落書きはすぐに再発するということを私たちは知っていました。そこで、落書きが描かれそうな場所にはペンキを塗ってきれいにしようと決め、小中学生に参加してもらおうということにしました。この決定には子どものうちから公共物を大切にする活動に関わっていれば、きっと落書きをしない青年になるだろうという願いが込められていました。この案にも関西ペイントが快く賛成してくれて、特別に開発した鮮やかな水色のペンキを無償で提供してくれました。その上、塗り方の指導も行ってくれたのでした。また、市役所の商業観光課からは刷毛やブルーシートの提供がありました。

「ペンキ塗りに参加をしよう」という呼びかけは、教育委員会を通じて、平塚駅周辺の小、中学校に連絡が行き渡り、いくつかの学校では、校長先生が全校生徒に声を掛けてくれたという報告がありました。でも、残念ながら当日の朝は雨が降ってしまい、ペンキ塗りが実行出来るかどうかは直前まで分かりませんでした。それでも活動をすると思えば子どもから大人まで合わせて30人ほどが参加をしてくれました。

## 5. 再発防止—張り紙はがし

ペンキを塗るところやその周りは張り紙だらけの状態だったため、実はペンキ塗りの前日には張り紙はがしが行われていました。平日だったので、会社勤めをしている人たちの姿は見られませんでした。商工会議所や市役所の職員などが業務の一環として参加してくれました。その人たちの制服姿を見て、ふと「市民参加」という言葉はあるけれど、「平塚をみがく会」は「企業参加」や「行政参加」も可能にしているボランティア団体なんだと気付きました。まさしく「協働」という言葉どおりの活動になったことを心から嬉しく思いました。

この日は活動の最中にざあざあ降りのひどい雨に見舞われましたが、誰ひとりとして張り紙はがしの作業の手を止める人はいませんでした。張り紙はがし活動には、消防士さんなど平日にお休みが取れる人たちや退職した元気な方々も加わって、参加者は20人ほどになっていました。

## 6. 再発防止—中学生のアート活動

ペンキ塗りが終わると、今度はもっとも落書きの再発が起きそうな場所に、外国などで成功している絵を描こうという意見が出ました。その場所は七夕祭りのメイ

ンの場所になるスターモール商店街の入り口2ヵ所にあるポール4本と中央部分に立っている大きなポール4本で、それらはみんなできれいにペンキを塗って下地が出来上がっていたところでした。しかし、街の中心地に絵を描くことについては商店街からの猛反対があり、会の中で意見が2つに分かれてしまいました。年配の方の中には、「幼稚な絵は落書きと同じばかりか、落書きをよけい誘発するからとんでもないことだ」と怒り出す人もいました。

落書きの再発を防ぐためには何とか工夫をしなくてはならないと考えたグループの人たちは、反対している人たちに絵を描くことの必要性をアピールしました。また、絵を描いてもらう人を集めるため議員さんを通じて教育委員会に話をしていただき、平塚駅近くの江陽中学校の美術部員の方々に声を掛けることにしました。でも、誰も中学生が描く絵がどんなものか分からず、会は緊張感と不安感が漂う重苦しい雰囲気になりました。そのような中、出来上がった絵のサンプルを見て私たちは、



大人たちの不安を吹き飛ばした躍動感あふれる中学生の絵



はっと驚きました。その絵には大人たちの不安なんかを簡単に吹き飛ばすほどの躍動感と、いきいきとした命を感じさせるものがあったからです。商店街の方々の態度は一変し、関西ペイントも気持ちよく協力を了解してくれました。こうして中学生の絵は街の中心に堂々と登場することになったのです。

中学生の絵はスターモール商店街の東口とそこから700メートルほど離れた西口に門のように対になって立っているポールの合計4本に描かれることになりました。この日はナイジェリアのチームが平塚市に来るまさに前日でした。絵を描くポールは円柱形というカーブをした形だった上に、表面には張り紙防止のための細かい溝が縦に刻まれていたので、作業は考えていたよりも何倍も大変なものになりました。下書きを描くだけでも大変だった上に、塗ったペンキが溝を伝わってたれてくるといった具合でした。それでも、美術部の人たちは、差し入れられたおにぎりを食べる暇も惜しんで完成まで夢中で力を合わせて描いていました。その姿に胸を打たれた人は少なくありませんでした。地域の人たちも手を差し伸べてみんなで助け合いました。作品が完成した時には夕日がすでに差し始めていました。

出来上がった4つの作品は、東側2つが「碧の光」で、西側2つは「天空」という対照的なテーマを持っていました。西側のポールに描かれた大きな太陽の絵をよく見ると、太陽から放たれた光の太い帯が1本ぐるとポールを一周していました。通りがかりのお母さんたちがいつの間にかホールの周りに輪になって、「若い人の発想ってすごいわね」と出来上がったばかりの絵を見上げていました。完成を喜んだ中学校の教頭先生は、「嬉しくってポール4本の間を自転車で行ったり来たりしてしまいました」と満面に笑みをたたえていました。このアートの作業には、アート活動で長い歴史を持つ厚木市や、平塚市と姉妹都市関係を結んでいるアメリカのカンザス州の方々が応援に駆けつけてくれて、80人以上の人たちが参加をしてくれました。

## 7. 工房絵のアート活動

スターモール商店街には出入り口の他にもポールが中央部分に4本ありました。それらのポールの近くには「工房絵（こうぼうかい）」と呼ばれる知的ハンディキャップを持った方々の施設がありました。その施設に通所する青年たちに絵を描いてもらうことをお願いしました。天真爛漫でピュアな心を持つ彼らが描く絵は高い評価を得ていて、喫茶店のスターバックスの壁やNHKのテキストの表紙など様々なところを飾っていましたが、残念なことに地元の平塚ではあまり知られていませんで

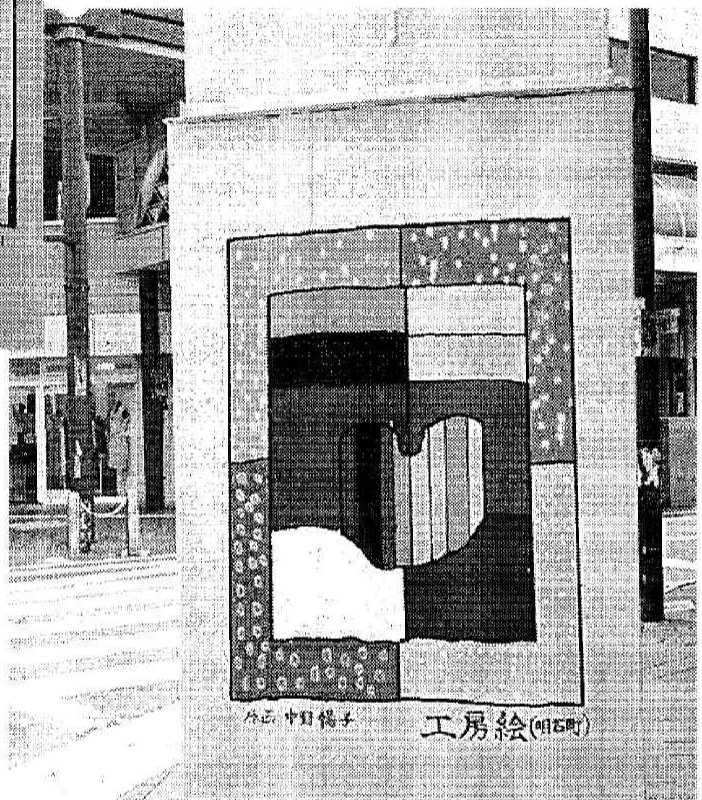
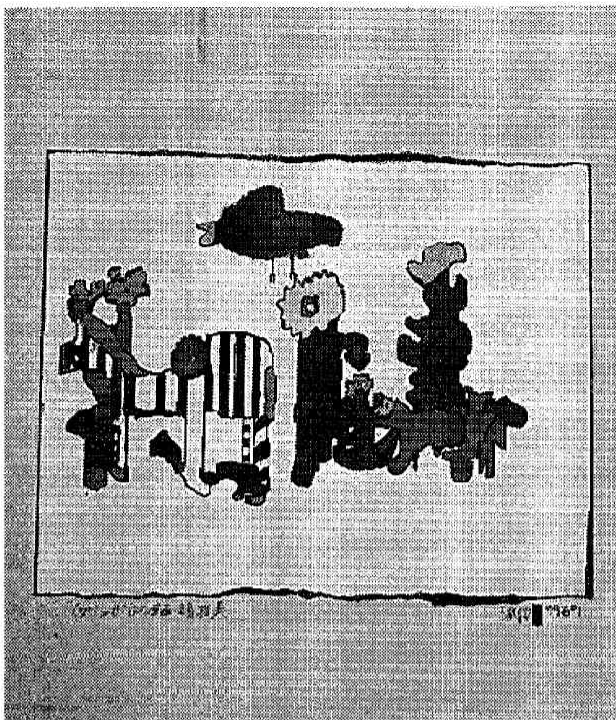
した。絵を描いてもらった日は、日頃から福祉活動に関心を持っている人たちなど、30人余りが参加をしてくれました。交通量がとても多い場所だったので、通所者が道路に出て怪我をしないよう、皆で気を配りました。また、今回のアート活動では、以前の活動で使用したような使い捨てのビニールシートの代わりに古新聞を使用するなど、環境に配慮する工夫を随所に取り入れました。

実は、これらのポールのうちの1本に私が大変心を痛めていた乱暴な日本語の落書きが描かれていたのです。落書きがあった時にはその前を出来るだけ早く通り過ぎたいという思いに駆られていました。でも、その落書きがみんなの手で消されて、工房絵の青年たちによる色鮮やかな作品で息を吹き返したポールに、しばし立ち止まって見とれてしまうことがありました。また、通行人の反応を見るのも楽しみになりました。

ポールの前に立っているとどうでしょう、お母さんの自転車に乗せられた小さい子どもがちょっと離れたところからでも絵に気付いて、「あっ、ネコさんだ」とか「お母さんキリンだよ」とはしゃいでいるではありませんか。このような反応を見るたびに、やっぱり子どもたちはちゃんと見ていたのだと気付かされました。そして小さい子どもの目に映るものが、もう汚くて無責任な感じがする落書きではなく、楽しくて心和ませてくれるものになってよかったと胸をなでおろしました。私はなんだかこの時、初めて大人としての責任を果たしたような思いになりました。見てみぬふりをする大人になることは簡単です。でも、苦労はしたけれど、違う選択をして良かったと思いました。そして、しみじみと1年前の自分を思い出しました。あの頃は落書きを見るたびに、どうして市役所が消してくれないのだろうと苛立ったりしていました。でも、自分たちの手で落書きを消すという問題に取り組んだことを通して、初めて「自分たちの街の問題はそこに住んでいる住民が解決することが当たり前ではないか」と気がつくことが出来て、自分が少し成長したことを感じました。

それだけではありません。街の問題を自分たちで取り組んで解決したことによって得られたことは、ただの落書き消し以上のものがあったと思いました。それは様々な人との出会いであり、街に対する愛着心や誇りであり、そしてなんとと言っても「人々が協力し合うことの大切さ」を知ったことではないかと思います。

「平塚をみがく会」はこのようにして2002年3月23日に発足し、それからわずか2ヵ月足らずで、駅前商店街を薄汚い落書きと張り紙だらけだった状態から、さわやかな作品に彩られたアートギャラリーへと変身させました。そして待望の5月20



湘南福祉センター「工房絵」の青年たちの  
色鮮やかな作品で息を吹き返した商店街のポール

日にはまちの顔であるこの商店街にみんなの手で花を咲かせた状態でナイジェリアのサッカーチームを歓迎することが出来たのです。当日の毎日新聞には「きれいな街、見て」と大きな見出しが付けられて、中学生が描いた絵が掲載されました。この2ヵ月の間に「平塚をみがく会」の活動に参加をしてくれた人は延べ230人以上にのぼっていました。情報をくれた人たちを含めれば300人以上の人が落書き消しに関わったことになります。2ヶ月後に行われた七夕まつりの際には、中学生や工房絵の青年たちが描いた絵の周りには飾りは取り付けられませんでした。それはきっと、それらの絵が飾りにも負けないくらいの感動をもたらすものだったからでしょう。

## 8. 落書きの再発と市民の意識の高まり

残念ながらその後、商店街で落書きの再発が2件立て続けに起こりました。1件目は「平塚を汚す会代表」と描かれた落書きで、明らかに私たちの会を挑発しようとしたもので、2件目は赤字で描かれた巨大な落書きでした。私たちは再発に対して心の準備をしていたものの、実際に再発が起きた時には、大きなショックを受けました。

でも、再発後は、落書きの対象物の所有者たちが「平塚をみがく会」に連絡を取ってくれたり、自分たちで仲間を集めたりして、あっという間に落書きを消してしまいました。この素早い対応には誰もが驚かされました。いつの間にか、落書きが描かれやすい商店街では再発が起きたらすみやかに連絡をし合い、手が空いた人たちが落書き消しに駆けつけるという態勢が出来上がっていたことが分かりました。このことを落書きに対する意識の確実な変化の証明だと受け止めた私たちは、自分たちの活動が意義あるものだったことを再認識したのでした。

私はこの時にふと、落書きがゼロの状態が落書き消し活動の原点ではないかと思いました。落書きを1つでもそのままにしたら、きっと街中が落書きで埋め尽くされてしまうのではないかと考えるようになったのです。ですから、「平塚をみがく会」の本格的な活動は落書きが無くなったあとから始まるのではないかと思いました。会の人たち全員もこれからも継続して落書き消しをしようという同じ姿勢を持っていました。もし市役所が最初に落書きを消していたら、きっと再発したとしても自分たちで消そうという気持ちは起こらなかったことでしょう。自分たちで落書きを消してきれいにしたからこそ、公共のものを大切にしようという気持ちが育まれて、未来につながる活動をしようという気持ちが生まれたのだと思います。

落書きは銀座などのきれいなところには描かれないものだと言われています。きれいにしておくことの大切さを知ってからというもの、「平塚をみがく会」の活動の範囲を広げ張り紙はがしやゴミ拾いなども活動に含めることにしました。

## 9. 「平塚をみがく会」の活動の広がり

現在では新しい会長さんのもと、活動は益々さかんになり、年間の参加者は延べ400人を超えていると聞いています。発足してから今までに活動に関わった人たちはすでに2005年度時点で延べ1,000人以上になったそうです。落書き消し活動は、囲碁祭りなどの催し物の前に行われる他にも、定期的にも行われています。アート活動は年間に2、3回くらいのペースで地元の学生さんたちを交えて行われ、2003



年には平塚聾学校の生徒さんとも活動をしたそうです。

平塚の街中を歩くときには、みなさんどうか気をつけてあたりを見回してみてください。そうすればきっと「平塚をみがく会」とプレートが入ったアート作品を見つけることが出来るでしょう。また、せっせと落書きを消しているグループの姿を目にするかも知れません。

「平塚をみがく会」の落書き消し活動は着々と広がりつつあります。最初は駅前商店街だけでしたが、後に平塚市内各地や近隣の市にも知れ渡るようになりました。それにつれて茅ヶ崎市、藤沢市、鎌倉市、横浜市から、落書き消し活動を見学したいと平塚市を訪れる人が出てきました。また、平塚市からは近隣の市に依頼されて会員が講師として出向いたりするようにもなりました。さらに、2003年には平塚市の落書き消しの活動日に合わせて湘南地区の3つの市が同じ日に落書き消しをするという「一斉落書き消し活動」を行って、大変注目を集めました。「平塚をみがく会」の影響は東京方面にも及んでいます。

マスコミを通しての報道も盛んに行われています。ラジオ、テレビ、新聞、コミュニティ紙などあらゆるメディアから関心を寄せていただき、繰り返し取り上げてもらっています。このような報道は落書きの抑止効果がとても高いので一石二鳥です。

箱根駅伝のテレビ中継の際には、走者が平塚を走っている時にアナウンサーが「平塚市には『平塚をみがく会』という落書き消しのボランティア団体があるんで



落書き消しの七つ道具

すよ」と解説をしてくれました。NHKの「ご近所の難問解決」という番組にも「平塚をみがく会」の会員が出演しました。新聞報道も湘南版だけではなく、2003年には全国紙の東京版にも掲載されました。2004年には「平塚をみがく会」の落書き消し活動のコンセプトがちょっと大げさですが、日本中に広がりつつあると聞きました。2005年には小学生の道徳の副読本に「平塚をみがく会」が紹介されました。

「平塚をみがく会」の活動がこんなふうによくの人に落書きや地域のことについて関心を持たせる展開になったことについては嬉しさと驚きの混ざり合った気持ちでいます。現在も「平塚をみがく会」を積極的にリードして下さっている会長さん、そして多くの会員の方々と活動に参加して下さいる方々に心より感謝いたします。

## 10. 最後に

「平塚をみがく会」の話はこの辺で終わりにします。1人の「気づき」が広がって、1人ではとうてい不可能なことが可能になったプロセスを知ってもらえたら嬉しい限りです。

最後にボランティアとはというお話にまた戻りたいと思います。ボランティアの主な特徴を3つ挙げてみましょう。

1つ目は、ボランティアの人間関係は「助けていると思っている人が実は助けられている」という不思議な関係です。人間がもともと持っている「本来的な関係」でボランティアの人間関係は成り立っているそうです。

2つ目は、ボランティアには「思いがけない展開が豊かな結果をもたらしてくれる可能性」があるということです。

そして3つ目は、ボランティアをしたことで「得られるもの」は「新しい人との出会い」や「新しい知識」だということです。でも、それだけではありません。「充実感」、「満足感」、「達成感」、「喜び」、「自信」、「誇り」などもボランティアをしたことで「得られるもの」に含まれるでしょう。

今の世の中は人々がバラバラで、物質的には豊かなのになんとなく「ハッピー」ではなくて、身近なところに放りっぱなしにされている問題のなんと多いことかと感じています。そんな時代だからこそ、自分の中の「気づき」をもっと大切にしてみませんか？ そして人と人とが心と心でつながり合うボランティア活動にもっと関わってみませんか？ ボランティアの経験はきっと、皆さんの人生を豊かにするし、皆さんの前に新しい考えやものの見方の広がりをもたらしてくれることでしょう。

ここでは、ボランティア団体がどうやって出来るのかを「平塚をみがく会」というボランティア団体を1つの例として紹介しました。また、ボランティアには不思議な魅力があるというお話もさせてもらいました。最後まで読んで下さってどうもありがとうございました。

参考文献 金子郁容『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波書店、1988年

### 平塚をみがく会

Since March 23, 2002

—子どもたちに安全な街を—

「ブローケン・ウィンドウズ・セオリー（割窓理論）」

「1枚の割れた窓ガラスをそのままにしておくと、やがて街全体が荒れて犯罪が増える。だからたった1枚のガラスでも割れたらすぐに修繕しよう」という犯罪予防理論を、ジョージ・ケリング博士が発表し、ニューヨーク市のジュリアーニ前市長が実践しました。その結果わずか7年間で殺人率を67%も減少させる実績を作りました。

私たちはこの理論に賛同します。平塚市に1つでも落書きをそのままにしておいたら平塚の街全体が落書きで埋められてしまうでしょう。だからたった1つの落書きでも、書かれたらすぐ消そうと活動を始めました。しかし現時点では、消さなければならない落書きがあまりにも多いのが現状です。

そこでみんなで“協働”して落書きを消しましょう。もしみんなで力を合わせて落書きを消したら、私たちはきっときれいで安全な街づくりが可能だと確信しています。

どうか皆さんも「平塚をみがく会」の活動に参加してみませんか？ 私たちは平塚市を「きれいですてきな街」にするために、街の景観をきれいにしたり、きれいな街づくりを通して青少年の健全な成長を助けたりする事を目的として活動しています。

詳細は<http://www.geocities.co.jp/hiratsukamigakukai/>までアクセスして下さい。皆さまのご参加をお待ちしています。

## 【解説】

日本社会のあまりにも急速な少子・高齢化の進展、政府や自体体の絶望的なまでの財政実態、年金や医療保険制度の行き詰まり、止まるところを知らない各方面の不祥事や貧富の格差拡大、大規模地震災害への不安、地球規模の人口爆発や、食糧・資源確保、環境問題への不安等々、日本のみならず世界は多くの難題に直面し、根底からその「持続可能性」(サステナビリティ)が問われている。「今までのまま」という安易な生き方が許されなくなったのである。

それでは、いったい誰が、難題を解決し、新たな活路を示す突破口を開いてくれるのであろう。日本のみならず諸外国の歴史を振り返って言えることは、多くの場合そうした役割を果たすのは、時の政治家や政府のお役人、あるいは高名な学者ではなかったということである。名もないふつうの人か、周囲からはむしろ「変な人」と呼ばれる人物だったのである。そうした人は、現代風に言えば、ボランティアや、あるいは市民活動のリーダー、NPOやNGOの指導者となって現れてくる。

21世紀を通じてボランティア活動や市民活動、NPOの重要性が高まっていくに違いない、そうならなければならないという思いも秘めて、経営学部では全国の多くの大学に先駆けて「ボランティア論」を開講し、「企業市民論」というユニークな科目も設けてこうしたテーマに取り組んできた。2000年度からの新カリキュラムでは「社会福祉論」と「NPOマネジメント」を開講し、いずれも平塚市内でボランティアやNPO活動で活躍する方々の協力を得て授業を進めてきた。

NPOマネジメント担当の綿引幸代講師(非常勤)が、2005年度の授業の特別講師として招いたのが本稿の筆者、諏訪裕美子さんである。講演は苦手と謙遜する諏訪さんは、まるでドラマのような自らの体験を丁寧に綴った原稿を用意し、受講生に切々と語りかけた。ボランティア団体の誕生の経緯がこれほど詳しく明らかにされた例は珍しいであろうし、平塚市民の歴史という点からも極めて貴重な資料と考え、本誌に掲載させてもらった次第である。

市民活動の多くがそうであったように、「平塚をみがく会」の活動も、諏訪さんというひとりの女性の「気づき」からすべてが始まった。多くの市民も、落書きの氾濫に気づかなかったわけではなかろうが、「しょうがな



いな」といった気持ちで見過ごしてきた。そんななかで諏訪さんは、「こんなことが放置されていいはずはない」と考え、行動に移した。何が諏訪さんを気づかせ、行動に移させたかと考えると、やはり英国という異国での生活体験が大きな影響を与えたことがうかがえる。異文化接触が新たな何かを生み出すとよく言われるが、諏訪さんのケースもそうした一例かもしれない。

気づいたとしても、それを市役所に電話をしたり、知らない人に呼びかけたりするのは、多くの日本人にとっては苦痛である。ひとりでそっと落書き消しをするほうが、気が楽といえども楽に違いない。しかし、それでは実効が上がらない。諏訪さんが勇気を持って周囲の人々に呼びかけたからこそ、わずか数ヵ月で中心街の落書きを消し終わったばかりでなく、新たな落書きの発生を防止する動きにもつながった。途中で周囲の人々から誤解や批判を浴びたこともあったようだが、それに耐えて乗り越える「勇気」を持っていたことは大きい。

諏訪さんの活動体験から改めて教えられるのは、落書き消しといったボランティア活動も、単なる善意だけでは済まないということである。やり方によっては危険さえ伴うことから、技術的な知識が欠かせない。地域の関係者の理解や協力を得ることも重要である。さらに、活動を継続していこうとすれば、経費も大きくなっていく。平塚をみがく会の場合、現場での募金の呼びかけに多くの市民の協力を得ることができた。その後、平塚市の創設した公益信託ひらつか市民活動ファンドによる助成も獲得している。

諏訪さんの体験を通じて、「ボランティアには不思議な魅力がある」という言葉には納得させられる。こうした活動がなければ出合うことのなかった、さまざまな人々との触れあいが、諏訪さんばかりでなくみんなの日々や人生をどんなにか豊かにしている。中学生のアート活動や、知的ハンディキャップを持った湘南福祉センター「工房絵」の青年たちの活躍など、聞くだけでも嬉しくなってくる。駅前商店街で始まった活動が、平塚市内全域に広がり、さらには近隣の茅ヶ崎市や藤沢市、鎌倉市、横浜市にまで広がっていったというのも頷ける。NHKの「難問解決、ご近所の底力」や、道徳副読本『みんなで考える道徳』（日本標準出版）に詳しく紹介されたことは、全国的な広がりへの契機にもなっている。

諏訪さんが平塚市を離れた後は、後継者の手で力強く活動が続けられている。現在の代表を務める原圃信夫さんは、平日はよく見かける猛烈ビジネスマンである。その生き方は、仕事と地域社会の両方に情熱を傾ける、文字どおり「二所懸命」そのものである。一人ひとりのこうした市民としての生き方が、難題を抱える日本や地球の未来を切り開く、貴重な「一歩」となるに違いない。

(神奈川大学教授 松岡紀雄)